# 幼稚園雜草を讀みて

長岡市　磨須子

「花としても飾るに足らず果實としても滋味あるものでない。だゞ雜草も枯れて後、土地の肥料になることのあるものだといふことを聞いて、小さい望みとしてゐるのである。」――……何と云ふ謙虛な序文でありませう。私は幾度之れを讀み返した事か。そして殆ど暗記してしまひました。幼兒と云ふ美花を培ふには余り貧弱な私の心！　此の心の土に滋味豐かな肥料を與へて呉れた「幼稚園雜草」は私の保姆生活中、忘れられない一事であります。

多くの書物の中から之程、反覆した本は少いでせう。讀めば讀む程興味の出る――へんな譬へですが丁度鰯を嚙みしめる時のやうに。

十四頁の「うるほひ」を讀了した時、私は涙で一杯になりました。長らくお遇ひ出來なかつた母のみ手に抱かれた時のやうな心持。語ゐの貧弱さや表現形式に疎い爲めに思ふ萬分の一も發表出來ないで惱んでゐる時に、此の間然する處のない大文字を拜見してホット救はれたやうな心持がしました。

何と云ふ美しい詩でせう、そうです、全く美はしい散文詩で御座います。せめて最後の一節なりとも聲朗らかに、うたはせて下さい。

「草花と同じく、斷えずうるほひを要求して居る

ものは幼兒である。

しかも如露よりも淺く小さく、直き涸れ易いものは我々の心である。

斷えずうるほひの與へ手とならなければならない我々は、又斷えずうるほひの沒み手でなければならぬ。」

## 寒風

風が野を貫いてゆく。どこまでつめたい風なのであらうか。そのゆく處、觸るゝ處、もの皆荒み敗られぬはない。つれなや只一ひら殘る梢の枯葉をだに吹き拂ひ振ひ落さではやまぬといふ。衰れや落された枯葉の群がまたもや、かさ〳〵と吹きまくられてゆく。どこ迄きびしい追窮の風なのであらう。

省みればわが心にもこの風はあるまいか。わがゆく處、觸るゝ處、一陣荒涼のつめたさを現じ、苛酷のつれなさを擅にする樣のことはあるまいか、其の目、其の唇、風の樣に人を貫き、割き、傷つくることはあるまいか。

風に荒らされた野は、また來ん春の恢復もある。一度び心の寒風の荒んだ心は、また恢復のよすがもない。

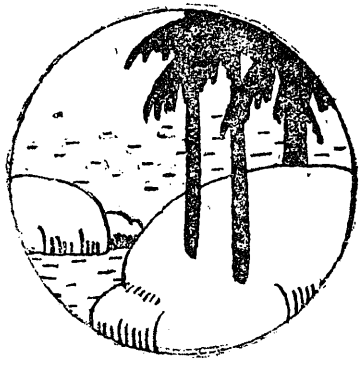
願はくば寒風をしてひとり野を吹かしめよ。わけても柔き子供の前に、わが怖しき寒風をして荒まざらしめよ。

## 我等の途

子供のお手本だと思へば苦しい。お手本は別にあつて、子供と一緒に其のお手本に進んで居るのだと思へばらくだ。子供の理想の標的だと思へば苦しい。理想の標的は彼方にあつて、自分も子供の先きに立つてそれへ向つて專心進みつゝあるのだと思へばらくだ。

聖者には聖者の敎育がある。完全者には完全者の敎育がある。しかも我等には我等にでも出來る

教育がある。凡人淨土、凡夫卽教育者。我等でも教育者になれる途がある。

餘りに長くなりますから之で擱筆しませう。只最後に『保姆その人』の題下で眞實に私達保姆の自重と發奮をうながして下された尊いおこゝろに衷心から感謝いたします。

幼稚園のバイブルとも云ひつべき「幼稚園雜草」を是非とも津々浦々にまで普及いたしたいものと日夜それのみ念じて居ります。（一・五・夜）